

わたしとこの町

File 2 苅生町

／ 自ら執筆した絵本 ／



院内には闘病中に力をもらった言葉で作成した日めくりカレンダーが飾られています。

苅生町に生まれて48年、私はこの町で接骨院を営んでいます。幼少期は2つ上の兄や近所の子たちと一緒に野山を駆け回り、魚を釣ったり、昆虫採集をしたりして自然の中で遊びました。学生時代は、野球やバレーボール、スキー、柔道などスポーツに明け暮れました。スポーツによる怪我也多かったので、医療系の勉強は興味を持っていました。転機が訪れたのは高校のときです。針治療を受け、そのときの施術に衝撃をうけそこから一気に今の道に向かって進むようになりました。

最初は金沢で働いていましたが、親にも地域の方々にもお世話になったので、開業はふるさとでしたいと思っていました。今はその夢が叶っています。

私は10年前に末期がんになり余命宣告までされていました。多くの方々に支えられたおかげで今は元気いっぱいです。がんを取り除くために脳の手術をしたので、多少、体は不自由になりましたが、決して不幸ではありません。それどころかこの上なく幸せです。現



日々、痛みのある方や病気の方の症状が少しでも楽になっていただくための手助けをしていきたいと話す東さん



接骨院院長・図書ボランティア

ひがし まさのり
東 将則 さん

在、地元小学校へ月1回、ボランティアで絵本や紙芝居の読み聞かせに行かせていただいています。坊主頭なので、小学校の子どもたちから「クリリンおっちゃん」というニックネームで呼ばれてとても嬉しかったです。偉人に関する本や道徳の本を読むことが多いですが、時には自身の経験から執筆した絵本を読むこともあります。再度生きたチャンスをいただけたので、まず自分と家族を大切にしたいうえで、今の私にできる範囲で少しでも社会貢献できれば幸いです。

新連載開始！

平成29年6月号から令和元年6月号まで連載した町会・町内会を紹介するコーナー「わがまち自慢」。その第2弾として、今月から「わがまち自慢人物編・わたしとこの町」の連載を開始します。このコーナーでは「人」と「町」にスポットをあて、74の町会・町内会の人々を五十音順で紹介していきます。



File 1 粟生町



演舞は棒ふり（棒を振って獅子に立ち向かうもの）が獅子を退治するものです。棒ふりは棒のほかに太刀、薙刀、鎖鎌の武器を用います。

粟生獅子舞を後世に残すため、多くの人に知ってもらうため、日々継承活動が続けています。子どもの頃は、秋祭りの日に獅子舞の道具一式を運ぶリヤカーの後ろについて獅子舞と一緒に町を回っていました。大人になり、最初に演舞に参加したときのことを今でも覚えています。

粟生の獅子舞は明治の初め頃、野々市の若者から棒ふりを習った



↑刃こぼれした薙刀。
全力で演舞した証です。



獅子頭

ことが始まりといわれています。加賀獅子舞の系譜をひく勇壮な獅子舞で、武器を壊れるかと思うくらいぶつけ合う迫力ある演舞が特徴です。市の指定無形民俗文化財にも指定されています。

獅子舞は市内外のイベントや祭典で演舞することもあります。メインは9月の秋祭りでの演舞です。それに向け盆明けから毎日練習を重ねます。秋祭りでは町内を一通り練り歩くので、朝7時から夜は9時過ぎまでかかります。

今いる20代のメンバーはキレがあつていい動きをしますね。迫力ある粟生の獅子舞をそのままの形で伝えていくためには理想とする型を教えていくことと、彼らのよ



伝統芸能粟生獅子舞保存会 会長

あさい ひでたか
浅井 秀孝 さん

うな若い人達をいかにして集めるのが課題なので、日々情報を集めています。実は、担い手以外にも道具の買い替えという問題があります。全国的に道具を作る職人が少なくなってきたのです。こんな時代だからこそ、職人の下へ足を運び、つながりを大切にしていきたいと思っています。

保存会の一番の目標は、秋祭りで毎年演舞することです。昨年は、女性の保存会メンバーが初めて誕生しました。町全体で一体感を持つて獅子舞を盛り上げる……。そんな未来を思い描いています。